

鷗外『魔睡』のスキヤンダル

— 〈姦通〉・語り・テキスト間相互関連性を視座として—

大塚美保

### Scandals in Ogai's *Masui* [Hypnotism]: From the Viewpoints of Adultery, Narration and Intertextuality

---

We can read Mori Ogai's novel *Masui* (1909) as a peculiar adultery story. The hero suspects his wife of having had a physical involvement with another man under hypnosis. This accident makes the hero notice that there is no assurance whether the baby in her belly is certainly his own child. As we can see, this recognition shakes the foundation of the national system, especially the civil law (the hero's field of specialization).

We readers can realize the narrator is unreliable when he narrates the last part of this novel. However his unreliability is a strategy that urges us to consider the problem about adultery and chastity. The narrator also suggests that the hero will get "some comfort" tomorrow, through reading a drama, *Tantris der Narr*. Following this instruction, we refer to the drama, and find different human relations without any "comfort" there. This is the narrator's strategy, too.

We can compare *Masui* with the contemporary feminists' (*Seito* school) discourse on chastity. They envisaged a woman as a subject, whose mind and body are unified. In *Masui*, the wife's situation is reversed, because of hypnosis. Hypnotism breaks up human identity and autonomy. The title *Masui* (meaning devil's/magic sleep) is based on this uncanny situation.

1 はじめに

森鷗外『魔睡』(『スバル』六号 明治四二・六)は、法科大学教授大川涉<sup>わたる</sup>博士の美貌の妻が、神経科医磯貝に「魔睡」すなわち催眠術を施され、その間に性的被害を受けた可能性が疑われるという、スキャンダラスな題材を扱った短編である。鷗外の妻しげ子の身に実際に起きた事件に関連するといわれ、磯貝のモデルとされる医学者、三浦謹之助の行状暴露という一面を持つ。<sup>(1)</sup> その意味でもスキャンダラスなのだが、近年では、催眠術が明治四〇年前後に獲得していたイメージもまた、一種胡乱なものであったことが、一柳廣孝により明らかにされている。一柳によれば、催眠術は「科学／非科学のあわいに佇む不可思議な装置」として、一面では医学に、一面では犯罪に結びつくとともに、「他者を自由自在に操ることの可能なシステム」という意味で、きわめて暴力的な装置<sup>(2)</sup>でもあった。

ところで、『魔睡』というテクストがはらむスキャンダル性は、右にあげたような諸点に尽きるのだろうか。催眠術を視座とする一柳の論は刺激的で示唆に富むが、清田文武が的確に指摘するとおり、この小説の「中心はあくまで主人公の心理状態に置かれているのであって、催眠術自体にあるのではない<sup>(3)</sup>」。主人公の大川が友人の杉村から受けた「磯貝へは細君丈は遣り給ふな」という忠告。磯貝の医院で「マツサアジユ」をされ「少しの間気が遠く」なったという細君の打ち明け話。こうした断片的な伝聞情報が大川の中で、妻が催眠術下に「サジエスト」(暗示)を受け、磯貝と性交渉を持ったのではないかという疑惑に編成され、その疑惑は記憶の断片や囁目の出来事を取り込みながら、

しだいに増殖してゆく。『魔睡』の基幹をなすこうしたプロセスから浮かび上がるのは、むしろ、催眠術を契機とする一種特異な〈姦通〉<sup>(4)</sup>の物語ではないだろうか。

このように本稿は、『魔睡』を〈姦通〉というコンテキストにおいて捉えようとする試みである。その際、次の四点を各章の課題として論を進めたい。第一点は、主人公の大川が「民法」の専門家であるという設定について(2章)。第二点は、結末部に見られる語りの戦略性について(3章)。第三点は、『道化役タントリス(Tantiris der Narr)』とのテキスト間相互関連性について(4〜5章)。第四点は、タイトルが催眠術ならぬ「魔睡」である理由について(6章)である。このうち第一点と第三点に関しては、その意図する所を、先行研究に照らしつつ今少し述べておく必要がある。

まず、第二点について。『魔睡』の最後は、「博士は明日車の中でTantiris der Narrを読むであらう。(中略)兎に角此一冊の脚本は、博士に多少の慰藉を与へることであらう」と結ばれる。「Tantiris der Narr」はエルンスト・ハルト作の戯曲で、「戯曲梗概四十七種」<sup>(5)</sup>に鷗外の手になる梗概が収められており、そこでの邦題が『道化役タントリス』である。『魔睡』のこの結びについて、岡崎義恵は、大川が「本能の跳梁する世界から放たれ」、「妻を許し妻を救ふことの出来る精神の高さ」<sup>(6)</sup>に至るであろう未来の暗示を見出している。また清田文武も、「問題は博士の心中で解決されるらしい」と読み取っている。しかし、これを本文に即して見れば、「多少の慰藉」とは文字どおり、いくらかの「慰藉」を意味するにすぎない。それどころか逆に、「慰藉」の余白にわだかまるものの大きさを側写している、という見方さえ可能であろう。この結びは、決してポジティブな未来を一義的に指示しようとしていないのではないか。そしてここには、断定的な言葉遣いを注意深く避けるような、意図的にして戦略的な語り手がいるのではないだろうか。

次に、第三点について。右の結びに引用され、テキスト戦略上重い機能を担うことが予想される『道化役タントリス』だが、前述した「戯曲梗概四十七種」中の短い梗概に言及した先行研究はあるものの、その全体像に論及したものはない。この戯曲には今までのところ邦訳がないが、東京大学総合図書館の鷗外文庫に鷗外所蔵のドイツ語原典一冊<sup>(9)</sup>が保存されており、これによって全体像を把握することができる。なお、「魔睡」には他にもヨーロッパ同時代文学からの引用が多数見られるが、これらについても先行研究ではほとんど論及されていない。引用は、かつては作家のペダンティックな姿勢の現れという程度で片付けられがちであったが、今日においては、テキスト間相互関連性の観点から再検討される必要がある。なぜなら引用は、そのテキストが他のテキストと対話関係に立つことを表示し、読者に他のテキストの参照を要請する指標にはかならないからである。

## 2 なぜ「民法」か —— 〈姦通〉が暴露するもの ——

磯貝は魔睡の間に奈何なる事をもサジェストすることを得たのである。そして細君は、自分が魔睡の間にサジェストせられて為した事を、魔睡が醒めてからは覚えてゐる筈が無いのである。此の魔睡の間の出来事は奈何なる程度まで及んだのであろうか。磯貝は為し得る限の事を為したかも知れない。

細君本人に記憶がない以上、磯貝と二人きりでいた間に起きたことの真相は、追及のしようがない。可能性はあるが証拠がない、妻の婚外性交渉。それは催眠術によって操られた人間の、所動とも自発とも定めがたい（6章でくわしく触れる）、一種特異な〈姦通〉である。細君の記憶が欠如しているため、むろん事実として確認された〈姦通〉で

はありえない。あくまでも夫である大川の内面に存在する、疑惑としての〈姦通〉である。この〈姦通〉は、大川に何をもちたたらしただろうか。

「大川渉」の名のとおり「大やうな、ゆつたりした」「何事があつても驚くの慌てるのといふことはない」彼、紛糾時にしばしば「快刀乱麻を断」ち、「何でも半分為るといふことが大嫌」だという、白黒の決着をつねに明確にしようとする彼。そんな彼をあざ笑うかのような「灰色」の疑惑、終わりの見えない宙づり状態が到来する。

その中で、大川の目に細君が新しい相貌をもって映り始める。そして、これまで彼が自明のものとして安住してきた夫婦の関係が解体する。細君の「派手な朝お召の二枚製の下から、長襦袢の紋縮緬の、薄い鶯色のちらついたのが、いつになく博士の目を刺戟した」時、大川は妻を、一個の性的対象として新たに〈発見〉したのだといえる。それは同時に、妻をそのように見る自分自身の発見でもある。換言すれば、大川が自分自身を、同じまなざしで細君を見たにちがいない磯貝、さらには、同じまなざしを共有するであろうすべての男性の中の一人として、発見したことを意味してしよう。

博士は今年四十を二つ越した男で、身体は壮健であるが、自制力の強い性で、性欲は頗る恬澹である。それに今日に限つて、いま妻が鶯色の長襦袢を脱いで、余所行の白縮緬の腰巻を取るなど想像する。そして細君の白い肌を想像する。此想像が非道く不愉快であるので、一寸顔を覚める。想像は忽ち翻つて、医学博士磯貝、囃君の目が心に浮ぶ。若いやうな年寄つたやうな、蒼白い皺のある顔から、細い鋭い目が、何か物を覗ふやうな表情を以て、爛々としてかがやく。

彼の「不愉快」に加担するのは、細君が人目をひく「珍らしい美人」であり、その容姿が、「黒人<sup>(くろごうと)</sup>ではないが、身分の低いものの娘であつたのを、博士の外舅が器量望で、支度金を遣つて娶つた」(カッコ付ルビ引用者) 母親の系統を引いていることであろう。玄人ではないが玄人を連想させる、美貌による「出世」を果たした母、その母に似ているという細君もまた、男性に玄人的な「何か」を感じさせるかもしれない。玄人女性は、性的牽引力をもつ存在として不特定多数の男性の視線に恒常的にさらされ、その性は商品としてあらゆる男性に開かれている。こうして、性的対象として〈発見〉された細君は、大川の中で、夫と妻という一対一の固定した関係から遊離し、全男性に対して開放された女性へと変貌するのである。

たとえ不確かな情報にもとづき、証拠を欠こうとも、その疑念<sup>(ぎねん)</sup>が夫の心中で増殖すること。「それ」をきっかけに、夫婦間で性が過剰に意識されはじめること。結果として、男性(夫)側のそれまでの秩序が動揺、または解体させられること。大川の上起きたこれらの現象は、既婚女性の婚外恋愛(あるいは婚外性交渉)を語った、古今東西のいわゆる〈姦通文学〉に共通のものである。ただし「魔睡」は、日本においても近代法の整備により、結婚が財産権をはじめとする社会的諸制度と密接に結びついた、ブルジョア市民社会的な〈契約〉となった時代を舞台としている。大川夫妻の経歴や夫婦家族であるらしい生活ぶり、「夫婦の間では隠し立<sup>(かくしだて)</sup>を致してはならない」という倫理、これらは近代家族の一つの典型を思わせる。トニー・タナー<sup>(10)</sup>が指摘するように、姦通文学が〈契約〉に対する〈違反〉を描くとするならば、「魔睡」における〈姦通〉(疑惑としての〈姦通〉)は、では、同時代の何に対する違反なのだろうか。細君は現在、妊娠七カ月である。大川は妻の打ち明け話を聞いた時、「この意外な出来事と細君の妊娠との関係に就いて、咄嗟の間に思つた事」がある。

Strindberg は父といふものは証明の出来ないものと云つてゐる。併し妻が産んだのではあるが、誰の子だか知れないと思つて育ててゐるといふことは、とても現の意識の堪へ得べき限でない。又誰の子といふことが知れるとしても、自分の子でないといふことが分つて育ててゐるといふことも、これも堪へられない。(中略) 博士は或る有夫奸事件の裁判の記録を読んだとき、賤しい男が、「底がはいつてゐるから好いと思ひました」と申し立てるところになつて、覚えず独で吹き出したが、忽ち顔を蹙めて記録を手から釈いた事がある。博士は不快を抑へて、細君を恕せようと思ふと同時に、この「底がはいつてゐる」といふ詞を思ひ出して、妙な心持がした。

《姦通》疑惑が大川を導いた最終地点はここである。すなわち、夫にとって妻の産んだ子が自分の子であるかどうかは究極的にはわからない、という認識<sup>11)</sup>。なぜなら、既婚女性の生殖器には「底がはいつてゐる」<sup>12)</sup>、すなわち夫との性経験がすであるため、未婚の《処女》と違い《私通》の痕跡を確認できないからである。結婚とは一つに、生まれた子の法律上の父と生物学上の父との一致を保証する契約であり、相統法における血縁主義は、この契約を不可欠の前提としている。妻の《姦通》はこの契約を無効にする、違反行為なのだといえよう。

このように考える時、大川が「民法に精しい」という設定が、大きな意味を持つことになる。民法とはまさしく夫婦、親子、相続<sup>13)</sup>の問題を規定する制度だからである。ドイツへ「民法研究を命ぜられて洋行した」という大川の経歴は、明治三三年公布のポアソナード民法が民法典論争によって撤回され、明治二六年設置の法典調査会がドイツ民法を取り入れた新たな民法の起草をはかったという民法制定史と、おそらく無縁ではない。「政府の方からの内意をも受けて」調査旅行に行くという現在をも考えあわせると、大川は、明治民法(明治三一・七施行)の制定と運用に参画する、いわばこの法の「内側」に属する存在と位置づけられよう。《姦通》は、この明治民法の原理である家父長

制と血縁主義を脅かす。いや、より正確に言えば、家父長制と血縁主義がしぶしぶ認めざるを得なかったであろう、次の民法条文をクローズ・アップするのである。

第八百二十条 妻カ婚姻中ニ懐胎シタル子ハ夫ノ子ト推定ス(傍線引用者)

民法の脆弱な根拠(実子であるとは「推定」に過ぎない)がこうして露呈する。

このように「魔睡」は、同じく学者を主人公とする鷗外の現代小説、「半日」「金毘羅」などと同様に、ある出来事をきっかけに主人公の日常的な秩序に亀裂が入り、彼がその内側に属して来た既成制度(本文中の語を用いれば「因襲」)が解体に瀕し、制度の根拠の自明性が疑われる、という構造を有しているのである。

### 3 語りの戦略性 —— 読者の参加を誘う ——

既成制度の根拠の自明性を疑うテキストとしての性格が最もストリートに現れているのは、大川が夜行列車に乗車して以降の部分だろう。大川の内面の叙述を中心とするこの結末部が前景化するのは、〈姦通〉と表裏一体の関係をなすモラル、〈貞潔〉に対する疑いと問いである。

本稿冒頭でも触れたように、この部分を読む際には、語りの戦略性への注意が欠かせない。この部分を、たとえば、大川と杉村の対話・大川と細君の対話の場面と比較してみよう。これらの場面は、直接話法による会話を中心とした、戯曲に近いスタイルであり、そこでの語り手は比較的透明な、没人格的なありかたをしている。これと対照的に、問題の結末部では、語り手は大川の内面を積極的に要約、整理しながら、そして時にコメントを加えながら、主に間接話法によって読者に「取りつぐ」。すなわち、独自の意思と判断をもち、物語内容に介入する語り手となるのである。

では、この結末部の語り手は何を目的とし、どのような手段を駆使しているのだろうか。

結論を先取りして言えば、その目的と手段は小説の発端、すなわち大川が旅行用手荷物を詰める場面において、引用を通じて早々に表明されていると考えられる。大川が『道化役タントリス』とともにカバンに入れた洋書、『デール全集第八卷』のエピグラフは次のようなものである。

最初に天才があった／最後に批評家が来る／よりよき最後のために結論を出すのは誰か？／君が出したまえ、公衆的天才よ（原文ドイツ語、稿者訳）

つまり、「Genius Publikus」（公衆的天才）すなわち読者に「結論」を委ねる、という宣言である。では、どうすれば「結論」を判断する行為へと読者を誘い込むことができるのか。その手段はこの直後に、「博士は首を掉つて、Genius Publikusに最後の判決は覚束ないなと云つた」と続くことに示されているよう。大川のこの懐疑的コメントは、先のエピグラフの宣言を相対化する、いわば対立見解である。つまりここでは、一つの問題について、相反する複数の見解を並行して提示する、という手段がとられているのだ。

問題となる結末部に帰って実例を見てみよう。たとえば、〈貞潔〉の問題に関して、

①博士は貞潔といふことに就いて、嘗て考へて見た事がある。貞潔なんぞといふものは、心の上には認むべき価値もあらうが、体の上には詰まらないものだと思つた。

という大川の見解が述べられるが、続けて、

②併し事実問題になると、博士は躊躇することを免れない。博士は自ら解して、かう云つてゐる。なに。おれは

古臭い前極まえきょくの心から汚れた女を排斥するのではない。併し情の上から言へば、器だつて人の使つたものは嫌だ。智の上から言へば、悪い病気を土産に持つて来て貰ふにも及ぶまいなどと云ふ。

という、大川の中の①と相反する見解が提示される。さらに続けて、

③実は博士は矢張因襲に囚はれてゐるのかも知れない。

という語り手のコメントが述べられる。これは②に含まれていた、「おれは古臭い前極の心から汚れた女を排斥するのではない」という大川の自己評価を相対化するものである。

もう一つの例を見てみよう。大川が「人に迫害を蒙つた時の反応の為方」について、

博士の心ではかういふ時に、いつも卑む念が強く起つて、憎む念に打勝つのである。卑んで見れば、憎む価値がなくなるのである。

と、大川の性向を一種超俗的な境地と見なすかのような、肯定的評価が示された直後に、

博士は往々此性質の爲めに人に侮られる。それは憎むことの出来ないのは男らしくないのだと解釈せられるからである。それとも博士には矢張男らしい性が關けてゐるのかも知れない。

という、否定的評価の可能性が併置される。

このように語り手は、相互に対立する複数の見解を並列的に読者の前に投げ出すにとどめ、最終的な結論、ないし一義的な方向づけを決して示さない。こうした叙述法の反復は、それが単なる偶然ではなく、語り手の戦略であることを示す。その戦略とは、読者を複数の可能性の中に置き去りにすることで、問題の考察と可能性の選択へと誘い込む、というものである。

右に加えて、因果関係ないし論理的脈絡の曖昧化、という手段も指摘しておかねばならない。次に掲げる「魔睡」

結びの一節について、一文一文の内容および文相互の接続が、読者の中に、「それはなぜか」「それは何を意味するか」といった問いを喚起せずにはいないことに注意されたい。

博士は明日車の中で「*Tristans der Narr*」を読むであらう。「*Tristan*と*Isolde*とのやうな恋中でも、男は恋人の人妻たるを忍ばねばならない。人妻たるは猶忍ぶべしである。何故*Denovain*のやうな、意地の悪い恋の敵が出て来て、二人を陥しいれねばならぬか。二人を焚き殺す筈の薪の火は神の息に消える。二人は*Morris*の沢辺に出て、狩場を通れた獣のやうに、疲れて眠る。二人の体は臂の長さを隔てて地上に横はつてゐる。其真中には*Morris*の剣が置いてあるのである。博士は、よしや貞潔を嘲つたことがあるにしても、これに感動せずにはゐられまい。兎に角此一冊の脚本は、博士に多少の慰藉を与へることであらう。

推量形（未来形）が多用され、疑問文に対する回答は示されず、平叙文は簡潔に過ぎ理由づけや説明を欠く。ここで語り手は、情報発信量を大幅に制限することで積極的に〈空所〉を作り出し、それを埋める試みに読者を誘っていると見てよいだろう。『道化役タントリス（*Tristans der Narr*）』中のトリスタンとイゾルデの恋について、また大川の「明日」について〈空所〉を埋めて行く試み、そのプロセスは、このテキストが投げかける〈姦通〉と〈貞潔〉をめぐるアポリアの場に、読者自身が参加し、問い、考えることに等しい。

以上から、「魔睡」における既成制度の自明性に対する問いは、登場人物大川ひとりのものではなく、そこには読者参加型の問いの場が用意されている、といえるだろう。

4 『道化役タントリス』とのテキスト間相互関連性——隠蔽された「明日」——

では、具体的に読者は、結びの二節（前掲「博士は明日も多少の慰藉を与へることであらう」の〈空所〉をどのようにして埋め、また〈姦通〉と〈貞潔〉についていかなる問いを問うのだろうか。冒頭でも触れたように、引用は他のテキストの参照を読者に要請する指標であるとの観点に立ちながら、『魔睡』と『道化役タントリス』両テキストの対話の中に、読者は何を読み得るかを論じてみたい。

まずは『魔睡』本文に即して、トリスタンとイゾルデの関係を〈空所〉を補いつつ〈解釈〉する所から始めよう。二人は「恋中」だが、イゾルデが「人妻たる」ゆえに、二人は共に「忍ばねばならない」。この「忍ぶ」が肉体関係の回避を意味することは、後出の剣のエピソードとの関連で決定される。すなわち、「Morrisの沢辺」で眠る二人の体は「臂の長さを隔てて」おり、「其真中にはMoroisの剣が置いてある」からである。男女の間の剣は、肉体関係の禁止、性的潔白を意味する。<sup>(16)</sup>ここから、「二人を焚き殺す筈の薪の火は神の息に消え」たのも、彼らの関係がプラトニックなものであり、肉体的に「無罪」だったためと解釈できる。つまりここでの二人は、婚外恋愛をしつつも、体の上では〈貞潔〉な恋人たちとして描かれているのだ。

だが、この一節が読者の疑問を喚起すると先に指摘した（前章末）のは、右のような解釈上の困難さというレベルにとどまらない。イゾルデが「人妻」と紹介されている以上、ここには夫の存在が刻印されている。とすれば、妻の〈貞潔〉をめぐる悩みつつある大川に「慰藉」を与える物語としてこれを引用するのは、奇妙な事態ではないだろうか。大川の細君がイゾルデに比されることは、彼女の美貌が日本人離れた白色人種的な特徴をもつと語られ、ま

た今日の磯貝事件に悩む車中の大川のイメージの中で、隣り合わせた西洋人女性の印象を媒介に、手にした『道化役タントリス』中のイゾルデに結びつけられていることに明らかである。では、トリスタン・イゾルデの物語と、大川夫妻に生じた今日の事件とを重ねあわせた時、大川自身は誰に相当するだろうか。イゾルデの夫以外にはあるまい。

大川は以前は、「貞潔なんぞといふものは、心の上には認むべき価もあらうが、体の上には詰まらないものだ」と思い、しかし今や「事実問題になると、博士は躊躇することを免れない」、肉体的に「汚れた女」を妻とすることに抵抗を覚えているという。つまり現在の彼は、「愛してゐる妻」に「心の上」と「体の上」両方の「貞潔」を望んでいるはずなのだ。婚外恋愛をする男女の間にも「体の貞潔」は存在する、人はこのように「倫理的」な動物であると示唆してくれる『道化役タントリス』は、その限りにおいては大川に「感動」を与え、細君の婚外性交渉疑惑に関して、いくらかの「慰藉」をもたらしてくれるかもしれない。だが、この戯曲は、夫に対する妻の「心の貞潔」を決して保証してはくれない。しかも、催眠術下で他人にコントロールされている状態では、後に6章でくわしく見るように、細君の「心の貞潔」は無力のはずなのである。

語り手が提示している情報やコメントには、このように、テキスト全体に照らして矛盾が含まれていることが見て取れる。そこで読者は、語り手の言を鵜呑みにするのではなく、その妥当性を立ちどまって懐疑・吟味するよう誘われる。ここでの語り手は、絶対の信頼がおける情報提供者ではない。いわゆる「信頼できない語り手」であることは、以上のように『魔睡』本文の範囲内で考える場合よりも、引用された『道化役タントリス』をあわせ読む場合に、いっそう明白となる。私たち読者が『道化役タントリス』を読むことは、すなわち、大川の「明日」の読書内容を経験することにほかならない。と同時に、大川や私たちに先だつてすでにこの戯曲を読んでいるらしい語り手が、結びの一節でどのような情報操作を行ったかを知ることにもつながる。結論からいえば、『魔睡』の結びに語られたトリス

タンとイゾルデの〈体の貞潔〉は、『道化役タントリス』のごく一部を拡大したものに過ぎず、大川が明日全編を読めば、〈姦通〉をめぐる大いに異なる物語に直面することになるはずなのだ。(戯曲全体の概要については稿末の「参考」を参照されたい。)

まず、二人の〈体の貞潔〉の証明となった「剣」と「神の息」についてだが、『魔睡』の叙述は『道化役タントリス』第二幕第一、二場、マルケ王と廷臣たちが十年前に起きたトリスタンとイゾルデの恋愛事件について交わす会話にもとづいている。それによれば、クルンヴァルのマルケ王は長く独身生活が続けていたが、廷臣たちの求めにより結婚を決意、甥のトリスタンが使者となり、アイルランドへ花嫁イゾルデを迎えに行った。結婚後、王は大公デノフアリン(イゾルデに密かに恋着し、それが報われないため、彼女を陥れようと狙っている)から、甥と王妃との仲が怪しいという密告を聞いた。王はイゾルデへの愛ゆえに嘆き狂い、彼女の動静を探したが、何の証拠もつかめなかった。デノフアリンはさらに、二人が夜昼なく共寝していると王を唆した。王はイゾルデを火刑に処したが、「神がそれ(火)を吹き消した」。そして恋人たちは一緒にモロイスの森に逃亡した。当時の森のできごとを王はこう回想する。

……ある夜余はそこ(モロイスの森)で二人に忍び寄った。(中略)イゾルデは眠っていた、トリスタンも眠っていた……二人は余の前に腕の長さをへだて、昔の中に背ざめて横たわっておった。そしてひどく疲れて、苦しげに息をしておった、まるで死の寸前まで追い詰められた獣のように。(うめきつつ)ああ、あの時もっと事が簡単だったなら! 見ると、諸卿よ、どうじゃ。堅苦しくも、二人の離れた体の間には剣が、モルホルムの鋭い剣が置いてあるではないか……余はそれをそっと己れの剣と取り替え、そしてまるで阿呆のように泣いた、二人の荒い息づかいを聞きながら。(17)

(稿者訳、( )内・傍線は稿者による)

興味深いことに、マルケ王が傍線部のようにうめくのは、剣という偶然の〈貞潔〉の証しゆえに、その場で二人を成敗することができず、その後今に至るまで、なお疑わしい二人の仲について、疑惑と嫉妬にさいなまれ続けなければならなかったという後悔ゆえである。「魔睡」の叙述とは裏腹に、剣の存在はあくまで偶然<sup>18</sup>、しかも夫を苦しめる悪しき偶然なのだ。王は嘆く。妻の〈貞潔〉は火刑の際の神の加護や、神明裁判<sup>19</sup>によってなぜか証明されてしまったが（彼は神の裁きの正しさをもはや信じられなくなっている）、妻の心はといえば、夫である自分と床を共にしている時でさえ、完全にトリスタンのものであると（第二幕第三場）。大川が明日の読書の中で出会うであろう夫の像、自身の役に回りに相当するマルケ王の姿とは、妻の〈体の貞潔〉によって「慰藉」を得るところか、逆により深い苦悩につき落とされ、惑乱し、周囲の信頼を失い、ついには愛憎混乱して、妻を「長患いの病者たち」（ハンセン病を患う浮浪の男たち）に下げ与えるというものだ。

もう一点注目すべきは、やはり「魔睡」とは裏腹に、この戯曲でのトリスタンとイゾルデは、ほぼ間違いなく肉体的に〈貞潔〉ではないということだ。このことは戯曲の各所で、先行するトリスタン伝説とのテキスト間相互関連性をも絡めつつ、暗示される<sup>20</sup>。たとえば、かつてイゾルデとマルケ王の新婚の夜、侍女ブランゲーンネは自分の婚礼服の白い肌着を主人イゾルデに貸したが、それは、イゾルデ自身の肌着がクルンヴァル到着以前にすでに破れていたためだという（第一幕第一場）。このエピソードは明らかに、トリスタンとイゾルデがアイルランドからの航海の途上で肉體關係を持ったことの暗示である。なお、先行トリスタン伝説では、肌着はより明白に〈処女性〉の隠喩であって、新婚の夜にイゾルデが処女でないことが露見せぬよう、侍女が密かに身代わりとなってマルケ王の床に侍したことを、侍女自身がこれと同じ肌着の比喩を用いて語る場面がある<sup>21</sup>。もう一例を、戯曲タイトルの由来となった場面からあげ

よう。十年の別離を経て変わらぬ愛をイゾルデに伝えようと、トリスタンは道化に変装し、タントリスと名のつて宮廷に入り込み、マルケ王や廷臣たちの居並ぶ前で、きわどい道化芸(22)（頭のおかしい道化が、自らを英雄トリスタンと思ひ込み、王妃の元恋人としてふるまうというギャグ）を装いながら、イゾルデに語りかける（第四幕第四場）。その中で彼は深い仲でなければ知りようのないイゾルデの裸体の特徴を口にする。

ただし、この戯曲の特異な点は、先行トリスタン伝説に関する知識を読者（観客）に要求しておきながら、伝説では堂々と公言されている二人の肉体関係について、一つの策略をめぐらしていることだ。それは、肉体関係を暗示はするが、決定的証拠を決してあげないということである。前述の裸体の秘密に関していえば、トリスタンがそれを語った直後に、イゾルデがかつて火刑に処せられた際、裸で公衆の面前にさらされたことが言及されるため、情事の証拠とは必ずしもいえなくなってしまう。疑わしいが証拠はない——二人の〈姦通〉をめぐらした宙づり状態に、読者（観客）はマルケ王とともに置かれることになる。この構図は、『魔睡』における細君の〈姦通〉をめぐら読者および大川の立場と、みごとに対応する。『道化役タントリス』と『魔睡』が交差するのは、このように、最後まで事実が確認されない疑惑としての〈姦通〉や、その〈姦通〉のために夫が置かれる救いの見えない立場、また、多くの男性を引きつけるその魅力ゆえに不運な目に遭う美貌の妻、といった諸点においてだと考えられる。

以上のように、読者が引用という指標にしたがって『魔睡』と『道化役タントリス』をあわせ読み、両者を対話させる時、前者が結びで提示している「多少の慰藉」とはまったく対照的な物語を、後者の内に見出すだろう。先に3章で指摘した、相対立する複数の命題の並立、一義的決定の留保という現象が、ここにも見て取れるのである。

『魔睡』の結びにおいて、語り手は『道化役タントリス』の一端をかいま見せ、それとは大いに異なる『その他』を隠蔽している。ただし、それは隠蔽のための隠蔽ではなく、読者をこの戯曲の『その他』の部分へ、また大川の

「多少の慰藉」の余白へといざなう、誘発目的の隠蔽と呼ぶのがふさわしい。参照すべき戯曲の名が明示されていることと、読者を問いの場に誘い出そうとする語りの志向とが、それを証しているよう。

## 5 明治末のトリスタンとイゾルデ —— 同時代読者の受容状況 ——

前章で見たように、『魔睡』の結びの一節における語り手は、絶対の信頼を置ける情報提供者ではない。そのことに私たち読者が気づくには、私たちが語り手が提示するのとは異なるトリスタン・イゾルデの物語を知っており、両者を対話させることが可能な場合の方が、より有利である。異なる物語の筆頭はこの場合『道化役タントリス』だが、それを読むためには海外から取り寄せるか、鷗外所蔵の一冊に頼るくらいしか方法がないという不便さは、同時代も現代も差がないように思われる。(むしろ、作者ハルトが活躍中で、この戯曲がシラー賞を受賞したばかりだった同時代の方が、単行本の取り寄せにははるかに好都合だったときえいえよう) そこでここでは、『道化役タントリス』を読まない読者が、トリスタン伝説について他のルートで情報を入手し得る可能性についても考察し、前章の補説としたい。トリスタン伝説関係の情報が豊富かつ容易に入手できる現代については、改めて論じるまでもないと思われるので、ここでは同時代について考えよう。

想定される同時代読者の代表<sup>23)</sup>として、発表誌「スバル」の同人や購読者を考えてみよう。彼らは新文学に関心を持つ青年知識人として、西欧の同時代文学や芸術について、当時の「明星」や「帝国文学」の掲載内容が指標となる程度の知識を有し得た、とまずは推定してよいだろう。この時代には、トリスタン伝説の全貌や伝本研究の成果などはいまだ輸入されていなかった。しかし、明治三六年に日本で最初のヴァーグナー・ブーム<sup>24)</sup>が到来し、姉崎嘲風らの中

心にリヒアルト・ヴァーグナーの思想・芸術をめぐる熱い議論が起きた中で、楽劇「トリスタンとイゾルデ」の概要はすでに紹介されていた。したがって彼らは、『道化役タントリス』のプレテクストであるトリスタン伝説の一端を、やはり同じ伝説をプレテクストとするヴァーグナー楽劇を通じて知ることができた。たとえば、『明星』一二号（明治三六・一二）掲載の姉崎嘲風の談話筆記「ワグネルの戯曲に於る恋」は、二人の関係を「姦通といふ一大罪惡を犯せり。一夜其密会をなせる所を発見せられて」と明快に説明している。このように彼らは、トリスタンとイゾルデの間柄が肉體関係をも含めた「姦通」であるという、「異なる物語」を知り得る立場にあった。

また、当時ごく少数ではあるが、洋行経験を持ち、海外で楽劇「トリスタンとイゾルデ」の上演を実見した文学関係者（永井荷風、上田敏、島村抱月ら）も存在した。ちなみに森鷗外もその一人であって、「再び劇を論じて世の評家に答ふ」（『しがらみ草紙』三号 明治二一・一二）中にその旨の言及があるほか、観覧時のものと推定される『トリスタンとイゾルデ』のリフレット（全曲の歌詞を印刷した小冊子）<sup>25</sup>が鷗外文庫に保存されている。全曲を見たことのある読者なら、有名な夜の密会の場面（第二幕第二場）で、恋人たちが暗示的にはあるが心身ともに結ばれること、さらに、この密会の露見により、イゾルデを愛している夫のマルケ王は深く傷つき、苦しむことを想起するだろう。そして、楽劇と「魔睡」とを対話させ、マルケ王にあたる大川にはたして「慰藉」があり得るか、いぶかることが可能だったといえる。

6 なぜ「魔睡」か —— 貞操論争との比較から ——

最後に、このテキストのタイトルとして、当時通用の「催眠術」ではなく、明治二〇年代の用語<sup>26</sup>であり、すでにア

ナクロな響きさえ帯びていた「魔匪」の語が選択された理由について考えてみたい。その際、比較の対象として、『魔匪』の五年後に活性化した〈貞操〉をめぐる同時代言説、いわゆる貞操論争を呼び出してみよう。

この論争は、過去に弟を養いながら「食べ」て行くため、自らの「貞操」を犠牲にしたと述べた生田花世「食べる」と貞操と」(「反響」五号、大正三・九)を発端とし、主に「青鞥」を舞台として大正三年から四年にかけて繰り上げられた<sup>(27)</sup>。この論争では、「貞操」は未婚女性の〈処女性〉の意に限定され、既婚女性の問題はほとんど取り上げられないという偏りがあった。とはいえ、安田皐月、平塚らいてうら生田に批判的な「青鞥」同人は、「貞操」を「人間の女の全般であるべき筈の懸換えない尊い宝」<sup>(28)</sup>、すなわち女性の人格や自我意識と不可分のものと位置づけ、さらに、当代一般には両性間の愛にもとづかない「肉の切売」<sup>(29)</sup>としての結婚が行われていると批判、「真の意味における処女破棄の最も適なる時がすなはち真正の結婚である日」<sup>(30)</sup>の到来を待望する、という論陣を張った。

このような「貞操」観は、今日的な視点から見れば〈処女性〉の觀念の特権化、神話化に加担したという一面を否定できない。だが一方では、結婚という契約、より露骨に言えば商取引の中で、「売り物」として扱われている女性の性を、女性本人の意思の下に奪い返すこと、すなわち、結婚に際して女性が客体ではなく主体となるためには、有効かつ必要な戦略であったといえよう。つまり、ここでの「貞操」は、女性の自我意識と性を、いいかえれば心と体を統一する結節点として位置づけられたのである。このように、貞操論争における議論は、恋愛と結婚、愛と性、また夏目漱石「それから」<sup>(31)</sup>の表現を借りれば「世間の掟と定めてある夫婦関係と、自然の事実として成り上がった夫婦関係」との、ロマンティック・ラヴ的な一致を志向していた。と同時に、そうした男女関係に、自らの心と体を統一して自覚的に参与する、〈主体〉としての女性像を要請していたといえよう。

これに対して、『魔匪』中の状況はどのようなものだろうか。磯貝は催眠術下の細君に、いかなることをも「サジ

エスト」することができた。覚醒後の細君は、催眠術下に自分が「サジエストせられて為た事」を記憶していない。大川が細君に、磯貝に二度と会ってはならないと忠告したのは、一度催眠術に陥ったことのある者は再びそれに陥りやすく、さらに前の被術時の「サジエスト」が「再び意識に上る」可能性があるのを恐れたためである。こうした特異な状況は、仮に細君と磯貝の間に性的関係があったとして、それに対する裁定をきわめて複雑で困難なものにする。まず、本人にその意思も自覚も記憶もない行為について、責任を問うことができるか、という責任能力の問題が発生するだろう。大川が、自分の専門分野の論文の中に磯貝の医学論文が引用されていたのを見たというのは、まさにこの「Zurechnungsfähigkeit」(責任能力) に関してのことだった。法と催眠術はこの点で交差するのだ。もちろん、法的には、被術下の細君には自らの行為に対する責任能力はなく、無罪と認められるだろう。という以前に、そもそも被害者として扱われるだろう。<sup>(32)</sup>だが、この問題の根深さは、催眠術なるものの性格上、こうした法の適用をもって解決しきれない、ある微妙さが生じてしまうところにあると考えられる。それは、次に見るように、被害者の行為が完全に所動的であった(自発的でなかった)とはいきれない微妙さのことである。

細君は大川にいう。「わたくしはもう其席(磯貝の前引用者)を遁れて出ますのが、毒蛇の口を遁れるやうな心持が致しましたのでございます。もうどんな事があつても、あの方にお目に掛からうとは存じません」、「お留守の間(大川の旅行中引用者)は外へは出ません積でございます」。このように、覚醒時の彼女は磯貝との《姦通》の意思などみじんもなく、夫に対して心から「貞潔」である。だが、催眠術は「サジエスト」により、ふだんの細君とは別人の、彼女自身も知らない彼女を出現させることができる。被術下の彼女は、帰宅後大川の隣室でそうしたように、磯貝の前でも「余所行の白縮緬の腰巻を取る」かもしれない。その時、別人格となった彼女の心は、自ら望んでそれをするのかもしれない。一柳廣孝<sup>(33)</sup>によれば、同時代の心理学の中には、催眠術を無意識に結びつける理論もあり、フレ

デリック・マイヤーズの「潜在意識」説や「識閩下の自我」の概念も紹介されつつあったという。このことを重く見るなら、細君の潜在的な性的欲望が催眠術によって識閩上に浮上するという、のちのフロイト理論（大正期に本格的に輸入される）を先取りするような図式を描くことさえ可能になる。いずれにせよ、催眠術は細君を、夫に対する〈貞潔〉というモラルに「心の上」でも「体の上」でも縛られない、自由なイゾルデにすることができるのである。では、その場合の〈姦通〉は所動か、自発か。細君がしたことか、別人がしたことか。大川にとって、それは妻でない妻がしたことである。だが、それをしたのはやはり、妻以外の誰でもないのだ。

ここでは、人間の統一的な〈主体〉の輪郭そのものが疑われている。心と体を統一し、自らの意思により行為を選択し、行為の結果に責任を負う、そうした〈主体〉が解体してしまう可能性が問われているのだ。こうした〈主体〉は、近代法が要請する倫理的市民のモデルに一致すると同時に、先の貞操論争が要請していた女性モデルにも一致する。そうした〈主体〉が溶け崩れる不気味な可能性を、心と体の相関する領域に関わる催眠術が暴き出す。このテキストのタイトルが「魔睡」でなければならない必然性はおそらくここにある。それはまさしく「魔の睡り」なのだ。

『魔睡』というテキストのスキャンダル性、それは、冒頭に紹介した諸点にのみあるのではない。先に見たように、〈姦通〉を契機として、民法に代表される男性中心主義的なシステムの皮を剥ぎ、揺るがす点にある、というばかりでもない。貞操論争に見られるような同時代の進歩的な結婚観が、また法に代表される近代市民社会の規範体系が、ともに前提としている〈主体性〉の概念（それは現代においてもなお有効性を失っていない）をも揺るがす点にあるのだといえよう。さらに、語り手の言述の信頼性をあえて犠牲にするような語りのあり方や、結末部の叙述内容がくつがえることも辞さないテキスト間相互関連性のあり方、こうした過激なテキスト戦略もまた、一つのスキャンダルに数

えてよいのではないだろうか。

注

- (1) 松原純一「鷗外現代小説の側面」(明治大正文学研究)二三号 一九五七・七、長谷川泉『鷗外』キタ・セクスアリス「考」(一九六八)、「長谷川泉著作選」三一 一九九一、ともに明治書院、小堀杏奴『朽葉色のショール』(一九七一 春秋社)、大屋幸世「『魔睡』に関する一資料——三浦謹之助の侍医就任をめぐる」(『鷗外』四六号 一九九〇・二)、後掲の清田文武論文(注3)などに詳しい。
- (2) 『空白』からの物語——森鷗外『魔睡』におけるメディアと性」(『日本近代文学』五二集 一九九五・五)
- (3) 『鷗外文芸の研究 中年期篇』(一九九一 有精堂) 第六章
- (4) この語が同時代の言説空間の中で有した語義・ニュアンスが本稿の論旨に深く関わるため、カッコをつけてこのまま用いる。後出の〈処女〉〈私通〉〈貞潔〉等も同じ。
- (5) 全集第二六巻。田中榮三「近代劇精通」(大正二 柳山書店) 所載の梗概の一部。
- (6) 『鷗外と諦念』上(一九四九 岩波書店、一九六九 宝文館)「本能の諦視」の章
- (7) 注3に同じ。
- (8) 漢語の「多少」には「多少楼台煙雨中」(杜牧「江南春詩」)のように「多くの」という意もあるが、ここをそう解さねばならない積極的理由は見出せない。
- (9) Ernst Hardt (Tantiris der Narr. Drama) 3A ufl. Leip., Insel-Verl., 1909
- (10) 『姦通の文学——契約と違反 ルソー・ゲーテ・フローベル』(高橋和久・御興哲也訳、一九八六 朝日出版社)。この一段落の記述は同書に多くを負っている。
- (11) 本文中、ストリンドベリからの引用は戯曲「父」によるが、この戯曲は全編を通じて大川のこの認識と同じことを語り、呪詛している。同戯曲のドイツ語版が東京大学総合図書館鷗外文庫に所蔵。August Strindberg (Der Vater. Trauerspiel) Aus dem Swedischen Uebers. von Ernst Bausewetter, Leip., Reclam. なお、A B O式血液型による科学的な親子鑑定が可能になるに

は、一九二五年(大正一五)、同血液型の遺伝法則の確立を待たねばならない。

(12) 元來は「本格的に飲食する前にする程度飲食してある意」(『日本國語大辞典』一九七二 小学館)、「振舞いにあずかる公の席へ出るか、または見栄の場へ出るかする前に、自費でまかなえるような安い酒を呑んだり飯を食ったりすること」(『正岡谷』明治東京風俗語事典』一九五七 有光書房、二〇〇一 ちくま学芸文庫)。ここでは飲食が性的な意味に転義されている。

(13) 大川が旅行カバンに入れた洋書の一つ、シェーンヘル(Shoenher)の「脚本」は、シラー賞受賞作とあるのみで題名が明示されないことから、テキストが読者に参照を要請している度合いは比較的低いといえるものの、この点においてやはり『魔睡』とテキスト間相互関連的な対話関係に立っている。この条件に該当するシェーンヘル(Shoenher)の作品「土地」(初演一九〇七、出版一九〇八、邦題は『戯曲梗概四十七種』による)は、父から息子への財産相続と、息子の結婚をめぐる喜劇だからである。『鷗外文庫所蔵』Karl Schönherr (Erde. Eine Komödie des Lebens) 2. Aufl. Ber. Fischer, 1909.

(14) 拙稿「半日」——〈近代〉のさわめく周縁」(『鷗外研究会編』『森鷗外』「スバル」の時代』一九九七 双文社)、「森鷗外『金毘羅』論——『青い花』の余香」(『日本近代文学』六一集 一九九九・一一)で論じた。

(15) 『鷗外文庫所蔵』Richard Demel (Gesammelte Werke von R. D.) 1-3Auszg. Ber. Fischer, 1906-09, 10v.

(16) アト・ド・フリース「イメージ・シンボル事典」(山下主一郎ほか訳、一九八四 大修館書店) swordの項による。

(17) 原文は以下の通り。(注9の『鷗外文庫所蔵本四四頁』)

．．． In einer Nacht hab ich sie dort beschlitten.  
Ihr Herren. Dieses weig von euch nur Dinas.  
Isolde schief und Tristan schief. . . sie lagen  
Auf Armesweite vor mir bleich im Moos  
Und atmeten so müd und schwer wie Wild.  
Das man zu Tod gehetzt.

Stöhnend

O, es wäre

- Damals so leichte Arbeit nur gewesen  
 Nun seht, ihr Herren, wie es kam : starr zwischen  
 Ihren getrennten Leibern lag ein Schwert,  
 Das scharfe Schwert Morholms . . . ich tauscht es leise  
 Für meines aus und weinte wie ein Narr  
 Ob ihrer Keuschheit
- (18) ちなみに、プレテクトスであるトリスタン伝説の諸本も、これを偶然、もしくは追っ手による発見を予測したトリスタンの策略としている。ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク『トリスタンとイゾルデ』（石川敬三訳、一九七六 郁文堂）「解説」参照。
- (19) 稿末「参考」参照。
- (20) この戯曲は、トリスタン伝説の後半、すなわちトリスタンとイゾルデ（金髪のイゾルデ）が一たび別れ、彼が異国で別人（白い手のイゾルデ）と結婚して以後の物語である。そのため、伝説前半に関する基本的な知識を読者（観客）が有していることが前提とされている。たとえば、第四幕第四場での「媚薬」の再現（稿末「参考」参照）の場面等において。
- (21) ジョゼフ・ペディエ編『トリスタン・イゾルデ物語』（佐藤輝夫訳、改版 一九八五 岩波文庫）第四、五章。トリスタンとイゾルデの伝説はケルト起源といわれ、中世の「エストワール」が一二世紀にフランス語で二種に改作され（ペルール「流布本」、トマ「風雅本」、これらをそれぞれ受け継いだドイツ語による二種の改作（アイハルト本、ゴットフリート本）を産んだ。右はこれら断片的な諸本を研究者ペディエが編集したもの。
- (22) ドイツ語Narには「道化」と同時に「阿呆」「狂人」の意味がある。
- (23) ここではいわゆる〈含意された読者〉をさし、同時代評に見られるような実際の受容例を考察の対象とはしない。実際の同時代評は「一種上品な科学小説の名を付したくもなる。私は好奇心で読んで、そして智識を得た」（中村星湖「六月の小説界」、『早稲田文学』明治四二・七）といったものである。
- (24) 中村洪介『西洋の音、日本の耳——近代日本文学と西洋音楽』（一九八七 春秋社）「付録」に詳しい。
- (25) (Tristan und Isolde) Leipzig, Breitkopf und Härtel (刊年なし)。赤インクによる書き込み、施線がある。第二幕第二場

の密会の場には「Zweite Scene」と施線。

(26) 一柳論文(注2)参照。

(27) 発端の生田論文以下、主な論文は次のとおり。安田皐月「生きる事と貞操と」(「青鞜」四卷一、二号 大正三・一二)、生田花世「周囲を愛することと童貞の価値と」(「反響」八号 大正四・一)、伊藤野枝「貞操に就いての雑感」(「青鞜」五卷二号 大正四・二)、平塚らいてう「処女の価値」(「新公論」大正四・三)

(28) (29) ともに安田皐月論文(注27)。

(30) 平塚らいてう論文(注27)。

(31) 「朝日新聞」明治四二・六・二七、一〇・一四、第二二六章。ちなみに連載開始は「魔睡」発表と同月である。

(32) 刑法(明治四一・一〇施行)には、第三九条「心神喪失者ノ行為ハ之ヲ罰セス」、第一七八条「人ノ心神喪失若クハ抗拒不能ニ乘シ又ハ之ヲシテ心神ヲ喪失セシメ若クハ抗拒不能ナラシメテ猥褻ノ行為ヲ為シ又ハ姦淫シタル者ハ前二条ノ例ニ同シ」とある。なお、催眠術下の行為を無罪とする当時のアカデミズムの見解が、一柳廣孝「催眠術の日本近代」(一九九七 青弓社)第二章に紹介されている。

(33) 注32に同じ(第四章)。なお、小倉時代を中心とする鷗外の心理学研究歴の中に「識閥」や「無意識」に関する説が含まれていたことは、清田論文(注3)第三章に詳しい。

### 〔付記〕

本文の引用は岩波書店版『鷗外全集』(一九七二)に拠った。すべての引用において漢字を新漢字に改め、ルビ・圈点の一部を省略した。

本稿は鷗外研究会での口頭発表(二〇〇〇年二月三日、於大妻女子大学)をもとに起稿した。発表時に賜った多くのご意見を参考にさせて頂いた。記して感謝いたします。

\* \* \* \* \*

【参考】エルンスト・ハルト『道化役タントリス』の概要

(人名・地名の読み方はドイツ語発音により統一した。)

第一幕 ルビン城内のイゾルデの私室

第一場 イゾルデ(金髪のイゾルデ)が黄金の髪をくしけずりながら、かつてトリスタンから贈られた魔法の子犬ベティクリューについての歌を歌う。続いて侍女ブランゲーネとの会話。歌と会話の中でイゾルデは、トリスタンが心変わりし、妻(白い手のイゾルデ)を娶ったことを恨み嘆き、嫉妬する。

第二・三場 イゾルデ、ブランゲーネ、小姓バラニスの会話。トリスタンとイゾルデの過去を回想し、現在の彼の裏切りについて噂する。会話の過程で次のことが明らかになる。——①イゾルデとマルケ王との新婚の夜、ブランゲーネは自分の婚礼用の白い肌着をイゾルデに貸した。それは、イゾルデの肌着がクルンヴァル到着以前にすでに破れていたため。②トリスタンとイゾルデは、かつてモロイスの森に逃げ込んだ。③マルケ王はトリスタンとイゾルデに、「今後、わが朝トリスタンがクルンヴァルの地に足を踏み入れたなら、彼は王妃イゾルデともども死なねばならない」と命じ、二人はその通りに誓約した。④イゾルデはトリスタンとの最後の逢引の際に、彼に指輪を与え、誓いをした。⑤その後イゾルデは十年間ティンタヨルの塔に幽閉され、今ようやくザンクト・ルビンの宮廷に戻ったばかりである。——トリスタンが暮らすアルントからの船がティンタヨルの港に着いたと聞き、イゾルデは、船の商人たちを召し寄せてトリスタンについて話を聞こうと、港に使いを派遣することを決める。

第四場 マルケ王が三人の諸侯を従えて現れ、イゾルデ帰還の宴を開くことを告げて去る。

第五場 ひとり後に留まった大公デノファリンとイゾルデの会話。イゾルデへの恋着から邪悪な情炎を燃やし続けてきたデノファリンは、彼女を脅迫し、自分と手を結ぶよう迫る。イゾルデは憎悪をこめて彼を拒否する。会話から次のことが明らかになる。——①かつてトリスタンとイゾルデの関係を王に訴え、二人を陥れたのはデノファリンである。②イゾルデは「神の奇跡」によって火刑での焼死を免れ、神明裁判では灼熱の鉄を手押し付けられたが無傷だった。

第六場 トリスタンとイゾルデの味方である男爵ディナスとイゾルデの会話。ディナスは今朝トリスタンらしき男を目撃、イゾルデの名をもって呼びかけたが、その者は立ち去ったと報告する。そこへ番兵が現れ、王の命令によりイゾルデを部屋に幽閉する。

## 第二幕 ルビン城内の広間

第一二場 廷臣たちの待つ中、マルケ王とデノファリンが登場し、トリスタンとイゾルデの過去の事件について会話を始める。会話から次のことが明らかになる。——①かつてマルケ王は長く独身生活を送っていたが、廷臣たちの求めにより結婚を決意、甥のトリスタンがアイルランド出身の花嫁イゾルデを迎えに行った。②デノファリンから甥と王妃の仲が怪しいと聞いた時、王は妻への愛ゆえに嘆き狂い、彼女の動静を探ったが何の証拠もつかめなかった。しかしデノファリンが、二人は夜昼なく共寝しているときさらには王を唆したため、王は火刑を執行したが「神がそれ(火)を吹き消した」。③一人がモロイスの森で逃亡生活を送っていた間、マルケ王は眠っている二人のそばに忍び寄ったことがある。その時、二人の体の間に剣が置いてあるのを見、王はそれをそっと自分の剣と取り替えて立ち去った。それに感動したトリスタンは、イゾルデを王に返した。④その後、灼熱の鉄による神明裁判でイゾルデの潔白が証しされた。⑤その後、王・トリスタン・イゾルデの三者間で先述の誓約(第一幕第二三場)がなされ、トリスタンは追放された。——今、その誓約が破られ、トリスタンは舞い戻ったらしいことに王は激怒している。

第三場 イゾルデが王との誓約を破ったかどで召喚され、審問が始まる。イゾルデはこの取り扱いが不当だと抗議し、港に使いを送ったのは慰みの買物のためであり、囚われた自分の召し使いたちを解放するよう求める。彼女を陥れようとするデノファリンは、森で(トリスタンらしき)男を見たと言証する。だがデイナスは、デノファリンの目撃談と自分自身の目撃経験との矛盾を指摘。これをうけて男爵ガネルンは、トリスタンが捕縛されるまで王妃の処刑は延期すべきだと提案する。以上の過程で、廷臣たちの心が王とデノファリンを離れ、イゾルデやデイナスの側にあることが明らかになる。王は酩酊、惑乱し、イゾルデの涙も微笑みも、自分ではなくトリスタンのためにあること、自分と共に寝ている時も、彼女の心はトリスタンのものであることを嘆き、怒り、彼女をこの日正午に病者たち(浮浪のハンセン病患者たち)に下げ与えることを宣言する。

## 第三幕 城の中庭

第一二場 イゾルデが病者たちに引き渡されるところを見ようと、民衆が集まっている。皆はイゾルデの美しさを称え、彼女の受難に同情する。中に一人よそ者の病者がいる。マルケ王、イゾルデを連れて現れ、教会の中へ姿を消す。

第三場 イヴァインを頭とする十二人の病者たちが登場、イゾルデの下賜(彼らはイゾルデをまったく自由に扱うことができ

る)と酒食のふるまいを期待してうかれる。よそ者の病者が来て、仲間に入れてほしいと頼む。

第四場 首斬り役人がイゾルデをつれて教会から現れ、病者たちに引き渡す。突然、よそ者の病者が他の十二人からイゾルデを奪い取り、イヴァインら二人と戦い、打ち倒す。残りの病者は逃げ去る。

第五場 よそ者の病者(じつは変装したトリスタン)は、イゾルデに自分の正体を明かさうと様々に語りかける。だが、中庭に引き出されて以来、目を堅くつぶったままのイゾルデは、最後まで目を開くことなく拒否の言葉を吐き続け、トリスタンの名を聞いても彼の結婚への怒りを吐露するばかり。そこへデノファリンが現れる。トリスタンはデノファリンを刺し殺し、城壁から飛び降りて走り去る。

第六場 騎士に仕える貴族の少年たちが現れ、イゾルデと死んだデノファリンを発見。イゾルデが純潔のまま助かったことは神の奇跡であり、デノファリンの死は彼のついた嘘に対する神の裁きだと噂される。マルケ王、イゾルデを苦々しく迎え入れる。

#### 第四幕 城内の丸天井の広間

第一場 廷臣たちが今回起きた偉大な不思議について噂しあっている。現場に聖騎士ゲオルクが現れた(トリスタンを誤認して)など。

第二場 マルケ王、道化ウグリンをつれて登場。王は冷笑的に神への不信を語る。またウグリンに、今日イゾルデを笑わせることができたら褒美を取らせると約束する。王と道化の会話ぶりから次のことが明らかになる。——道化は王と対等に語り、無礼を働くことも許される(道化の自由)。

第三場 イゾルデが現れると、廷臣たちは彼女を聖女のように崇める。王は機嫌を損じ、ウグリンとチェスを始める。イゾルデはディナスとチェスを始める。ウグリンは、皮肉を飛ばしたり、だだをこねたりして冗談を連発。しかしイゾルデは笑わず、自分は不幸だと涙する。玄関によそ者の道化が現れ、マルケ王に奉公させてほしいと騒ぎ立てる。

第四場 よそ者の道化は、王の御前での芸を許される。道化は、自分がかつてイゾルデの恋人であり、マルケ王に仕える騎士であったという物語を語り始める。イゾルデは王に、道化を追い出すようくりかえし求めるが、王は聞き入れない。彼女は、道化が自分とトリスタンしか知り得ないはずの媚薬(二人を結びつけた魔法の薬)のを知っているので不気味がる。また、道化が自分を巻き込んで媚薬を飲んだ当時の状況を再現した上、今回は自分の与えた杯を拒否してみせたので、侮辱されたと怒る。

王や廷臣たちは、当初はこれらを新手の道化芸として面白がったものの、道化が宮廷の事情に詳しすぎる上、イゾルデにシヨックを与えたことで、魔法使いではないかと怪しむ。道化はタントリスと名乗り、一同周知のトリスタンとイゾルデの恋を種に、イゾルデとの肉体関係をほめかすきわどい物語を始める。王は激怒するが、「道化の自由」を認めざるをえない。廷臣たちには大いに受ける。タントリス（じつは変装したトリスタン）は、道化芸の虚／実、笑い／涙のあわいで、過去の事実とイゾルデへの想いを語りつづける。その中で、タントリスはイゾルデの裸体の詳細（胸にあるアザ）を口にする。いきり立つ王にイゾルデは、かつて自分は火刑の際に裸体の面前にさらされたことがあると述べて、とりなす。

第五場 異国の騎士が森で瀕死のけがを負って捕縛され、王の御前に運ばれて来る。彼はトリスタンの妻の兄キュルディンと名のり、トリスタンは現在その妻と共にいると証言して死ぬ。森で目撃された男は彼だとわかり、道化タントリスをトリスタンの変装と目していたマルケ王は「神は私をからかっている」と叫ぶ。死んだ騎士の所持品として番兵がさし出した指輪（かつてイゾルデがトリスタンに贈ったもの）を、タントリスは自分のものだと言って奪う。怒る王の前で、道化ウグリンはタントリスをかばい、許してもらう。

第六場 人々が去り、ウグリンとタントリスのみが残る。眠りに入る前、ウグリンは道化奉公の憂さを語り、タントリスを慰める。

### 第五幕 翌朝早く、同じ広間

第一場 侍女ブランゲエネがタントリスのもとに現れ、王妃に指輪を返し、早く出て行くよう言うが、彼は拒否する。

第二場 イゾルデが現れ、タントリスに同じ事を命ずるが、彼は聞かず、指輪にかけた二人の誓いのこと、一心同体だった過去について語る。イゾルデは、道化が恋人トリスタンの醜悪なカリカチュアを演じて自分を苦しめるのは、白い手のイゾルデの悪意に満ちたたくらみに違いないと思ひ込み（夫トリスタンから聞き出した過去の恋の秘密を、道化に教えてこの宮廷に送り込み、夫の元恋人を愚弄しようというもの）、取り乱す。錯乱の中でつかのま、かつての愛の歓喜の記憶をタントリス相手に蘇らせるが、タントリスが、自分が真に愛するのは金髪のイゾルデのみと言ったことに再び激怒、猛犬フステント（もとトリスタンの愛犬、現在宮廷で飼われているが、誰にもなつかない）に噛み殺させると脅す。タントリスは犬の名を聞いて欣喜し、その檻へ向かう。

第三場 心配になったイゾルデはブランゲーネに檻を見に行かせるが、すでに空だった。窓の外に、はしやぎまわるフスデントを連れて去って行く道化タントリスを発見し、彼が本物のトリスタンであったことを悟る。